

## 千葉県印旛郡印旛村戸ノ内貝塚第3次発掘調査概報

高橋龍三郎・菊地有希子・井出浩正・森下壽典  
中門亮太・大網信良・新海達也・根兵皇平

### はじめに

印旛沼の東岸、戸ノ内貝塚から八千代市に接続する台地上には神野貝塚（縄文後期）が立地する。中央に窪地をもつ、直径100mを超える大型貝塚である。縄文後・晩期の拠点遺跡の一つであったろう。一方、印旛沼を挟んで、戸ノ内貝塚の対岸の北方数kmには、2005年に国の史跡に指定された井野長割遺跡が位置する。規模の大きな土盛り遺構や大型住居など、縄文時代後期における本地域の特徴をよく備えた遺跡である。さらに対岸には江原台貝塚や吉見台遺跡など、本地域には関東地方を代表する遺跡群が並び、緊密な地域社会のあり様を垣間見せてくれる。指呼の間にある集落群を繋いで、様々な婚姻関係が結ばれたに違いないし、親族集団や宗教などの結社的集団が行き来した姿が彷彿とする。縄文後・晩期社会とは、地縁的な関係に加えて、血縁に基づく親族制度が社会的に重要性を増す時期であり、その点において戸ノ内貝塚の集落も重要な結節をなしていたはずである。集落間で相互に共有される土器型式や宗教的施設・遺物は、結局はそのような地域社会の交流の産物であり、親族関係、地縁関係等に還元して考察されることになる。私達は、そのような目論見を持ち、この遺跡を発掘調査して3年目を迎えた。ここに報告するのは、正課授業である考古学実習の成果であると同時に、学術的な課題に向けた研究成果である。 (高橋龍三郎)

### 1. 調査組織

本次の調査概要および調査組織は以下の通りである。

調査名称：戸ノ内貝塚第3次発掘調査

調査主体：早稲田大学文学学術院考古学研究室

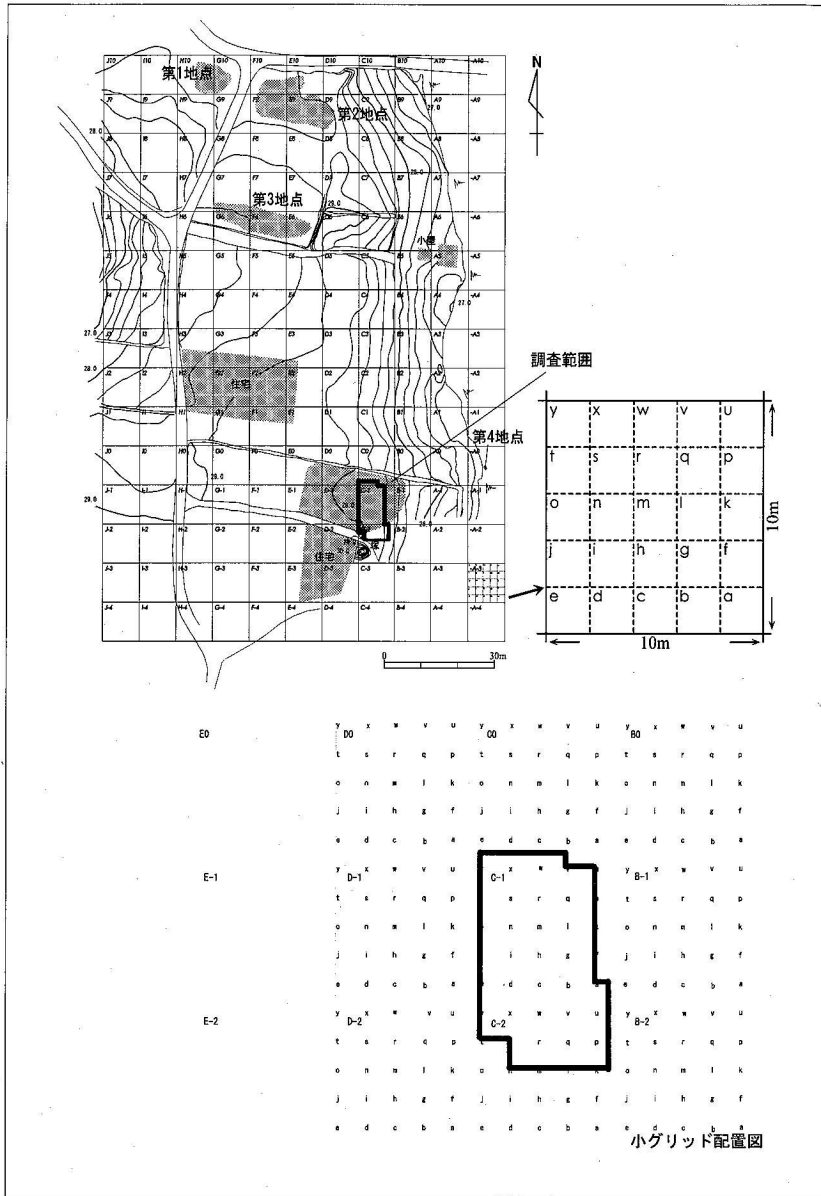
調査期間：2006年9月2日～24日（10日・17日・18日を除く）

調査の種類：学術調査

調査面積：125 m<sup>2</sup>（申請時）

調査担当：高橋龍三郎（教授）・菊地有希子（非常勤講師：考古学実習Ⅰ・Ⅱ担当）

調査指導：菊池徹夫（教授）・岡内三眞（教授）・近藤二郎（教授）・寺崎秀一郎（助教授）・山形真理子（客員助教授）

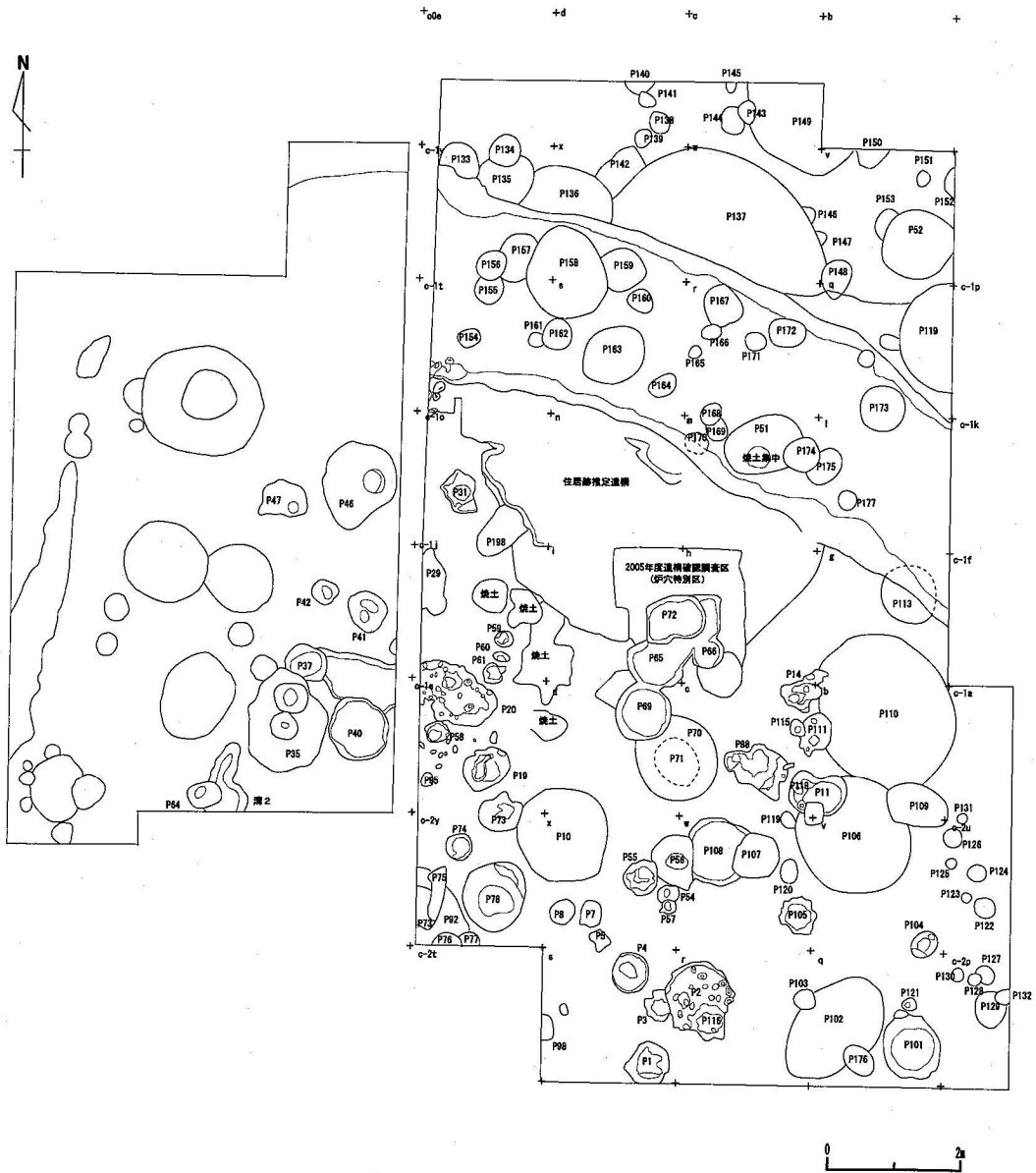


第1図 戸ノ内貝塚周辺地形図および第3次調査区

調査主任：井出浩正

調査庶務：森下壽典

調査参加者：熊林佑允・米澤雅美・川辺知子・菅原広史・川畑隼人・中門亮太・長屋憲慶（以上大学院生）、鈴木達也・阿部恵・大網信良・坂本翼・新海達也・根兵皇平・八木千紘（以上学部4年生以上）、青木弘・安藤航・石原由起・伊藤翔太・伊藤昇・千田麗紗子・高島智子・土屋隆史・中屋啓太・根鈴健之・長谷川陽・三浦恵・村上朋絵・吉場大輔・



第2図 第2次・第3次発掘調査遺構平面図

阿部和俊（以上3年生）、青木香織・石井彩子・石橋薫・江見恵留・太田千香子・河原田真紀・北村玲・窪田未来子・小松寛子・鈴木健太・高山麻衣子・竹島照雄・館美保・谷典子・釣谷菜々未・長瀬吏・中山舞・秦典子・林智久・平原信崇・真塩悠位・益満大輔・町田卓文・松原佳佑・萬篠貴昭・三浦由紀子・深山絵実梨・柳原拓・山尾和宏・行沙織・吉野雄（以上2年生）、鈴木朋美（同志社大学交換留学生）、チェンメンホン（カンボジア国費留学生）

調査協力：能勢幸枝（印旛村教育委員会生涯学習課文化財係）、印旛村教育委員会、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県教育委員会

なお、以上の他に、整理作業において盛戸一彦・八林朋宏（学部2年生）の協力を得た。また溝状遺構の出土遺物の整理においては長谷川陽からの協力を得た。（井手浩正・森下壽典）

## 2. 調査の経過と方法

戸ノ内貝塚第3次調査は、前年度の発掘調査によって検出された遺構群の発掘調査と発掘区内の新たな遺構の検出を目的とした調査である。第2次調査では、縄文時代に比定される74基の土坑および、古墳時代に比定される発掘区を東西に弧状にめぐる溝状遺構、縄文時代早期後葉段階と推測される炉穴群などが検出され、土坑と炉穴群の一部、溝状遺構の一部について調査を行った。なお、それらの調査概要については本学文学研究科紀要第52輯を参照して頂きたい。

2006年度は、上記のように前年度において検出された土坑と溝状遺構遺構内容の特定を中心に調査を進めた。調査成果は、土坑が新たに約100基確認されそのうち8基の発掘調査を行ったこと、溝状遺構の掘り方まで発掘を完了させ、溝状遺構が古墳時代中期～後期の周溝である可能性が高いこと、そして周溝検出時に縄文時代晩期に推定される住居跡1軒を新たに検出したことが挙げられるだろう（第2図）。

発掘は学術調査と同時に正課授業である考古学実習Ⅰ・Ⅱの一環であり、そのため発掘技術のトレーニングを主眼におくため、遣り方測量とオートレベルを用いた遺物のドット上げを中心に行い、光波測距儀と電子平板がこれを補佐した。遺物の取り上げは極力全点ドットに努め、遺物の出土状況や遺構との関連、遺構間での接合関係などの把握に配慮した。また、土坑や溝状遺構等からは必要に応じて土壌サンプルを採取し、フローテーションを中心とする微細遺物の検出作業を試みている。さらに、溝状遺構の断面から採取した土壌分析および、土坑出土の炭化物の年代測定を株式会社パレオラボに分析を依頼し、顕微鏡レベルでの植物質遺存体の検出と炭素年代測定法を用いた較正年代を測定した。

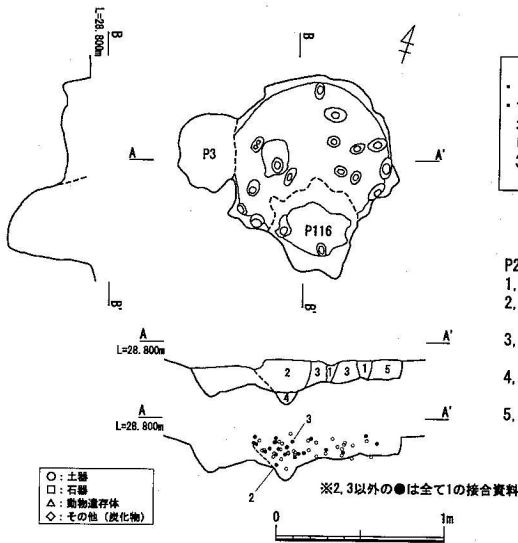
なお、発掘によって出土遺物ならびに図面類は本学文学部考古学研究室にて保管し、考古学実習等の授業を含め、現在整理作業を進めている。（井出浩正）

## 3. 検出された遺構と遺物

### ①土坑

土坑の調査は、前年度調査で確認された遺構の発掘調査と新たな土坑の検出を併行した。その結果、新たに約100基の土坑が確認され（累計174基）、そのうち8基について発掘を進めた。ここではそれらのうち、これまでに整理作業が進んでいる土坑を中心に報告する。その際、掲載する土坑の縮尺は30分の1に統一した。なお、整理作業の便宜上、現段階は土坑の呼称をP+番号という略

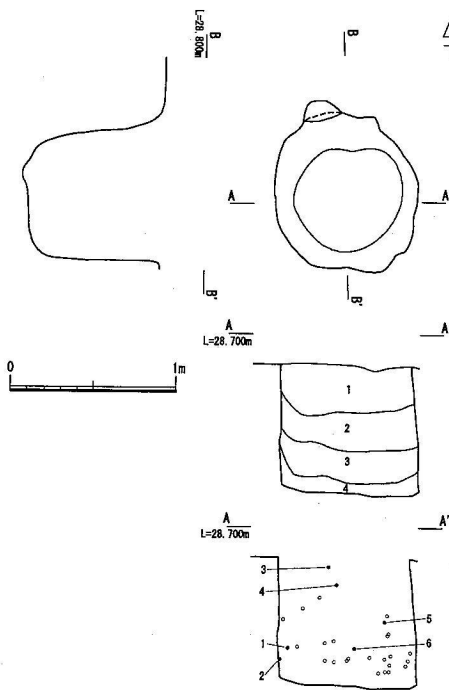




〈土層説明凡例〉  
 ・しまり・粘性は、弱～やや弱～中～やや強～強、の五段階で示した。  
 ・含有物は『新版標準土色帖』に従い、粒状構造は、極小・小・中・大・極大、塊状構造は、極小・小・中・大、にそれぞれ分類した。また、含有割合についても同様に『新版標準土色帖』を使用した。便宜的に1・2%を極微量、3・5%を微量、7・10%を少量、15・20・25%を中量、30・40・50%を多量と分類して適用している。

- P2
1. 10YR2/3 黒褐色(しまり弱～やや弱・粘性弱、ローム粒中を極微量を含有)
  2. 10YR3/4 暗褐色(しまり中～やや強・粘性やや弱、ローム粒中を少量・炭化物粒中を極微量・焼土粒中を極微量含有)
  3. 10YR4/4 褐色(しまりやや弱～中・粘性弱～やや弱、ロームブロック小を微量・炭化物粒中を極微量・焼土粒中を極微量含有)
  4. 10YR4/3 にぶい黄褐色(しまりやや弱～中・粘性やや弱、ローム粒中を微量含有)
  5. 10YR4/4 褐色(しまりやや弱・粘性弱～やや弱、ロームブロック小を中量・ロームブロック大を少量・炭化物粒小を極微量含有)

※2, 3以外の●は全て1の接合資料

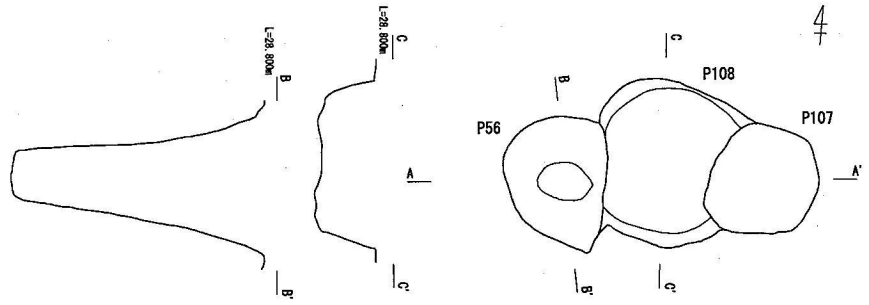


- P101
1. 10YR4/4 褐色(しまり中～やや強・粘性やや弱～中、ローム粒小を中量・ロームブロック中を少量・炭化物粒極小を極微量含有)
  2. 10YR5/8 黄褐色(しまり・粘性やや弱、ローム粒小を極微量・ロームブロック中を中量・炭化物粒極小を極微量含有)
  3. 10YR4/6 褐色(しまり中・粘性やや弱、ローム粒小を極微量・ロームブロック中を微量・炭化物粒小を極微量含有)
  4. 10YR5/8 黄褐色(しまり中～やや弱・粘性やや弱、ロームブロック小を極微量・炭化物粒極小を極微量含有)

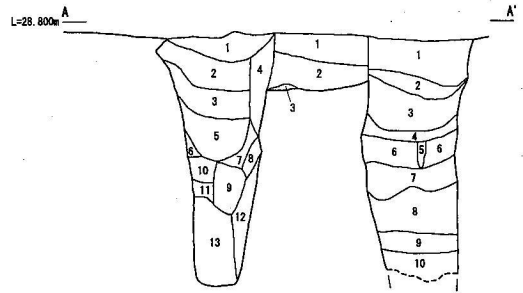
第3図 検出された土坑 (P2・P101)

式名称で称する。

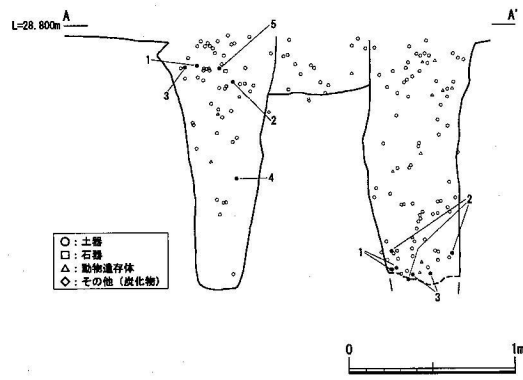
P2は発掘区南端近くで検出された。平面形態はややくずれた円形を呈し、精査の結果P3を切り込み、P116に南東部分を切り込まれていることが判明した(第3図)。断面形は確認面から底面までがごく浅いため不明瞭である。最大径は90cm、底面までの深さは27cmを測る。遺構確認時の土色は



- P56
- 1, 10YR2/3 黒褐色土(しまり・粘性やや弱、ローム粒小を少量含有)
  - 2, 7.5YR2/3 極暗褐色土(しまり・粘性やや弱、ローム粒小を中量・炭化物を含有)
  - 3, 7.5YR3/2 黒褐色土(しまりやや弱・粘性中、ローム粒小から中を少量含有)
  - 4, 10YR3/4 暗褐色土(しまりやや強・粘性中、ローム粒小から中を中量・炭化物(腐植土?)を含有)
  - 5, 10YR3/4 暗褐色土(しまりやや弱・粘性中、ローム粒小から中を微量・ロームブロック大を中量・炭化物を微量含有)
  - 6, 7.5YR2/3 極暗褐色土(しまりやや弱・粘性中、ローム粒種小を少量・ロームブロック中を含有)
  - 7, 10YR3/4 暗褐色土(しまり中・粘性中、ローム粒小から中を極微量含有)
  - 8, 7.5YR2/3 極暗褐色土(しまりやや弱・粘性中、ローム粒小を極微量含有)
  - 9, 10YR3/2 黒褐色土(しまりやや弱・粘性中～やや強、ローム粒種小を極微量・炭化物を少量含有)
  - 10, 7.5YR3/2 黒褐色土(しまり中・粘性中、ローム粒種小を極微量含有)
  - 11, 7.5YR2/2 黒褐色土(しまりやや弱・粘性中～やや強、ローム粒小を微量・炭化物を少量含有)
  - 12, 7.5YR4/4 褐色土(しまりやや強・粘性中～やや強、炭化物を微量含有)
  - 13, 7.5YR3/2 黒褐色土(しまり中～やや強・粘性やや強、ローム粒小から中を微量含有)



- P107(掘削途中)
- 1, 7.5YR3/2 黒褐色土(しまりやや弱・粘性弱、ローム粒小から中を少量含有)
  - 2, 7.5YR3/1 黒褐色土(しまりやや弱・粘性弱、ローム粒大から極大を少量・炭化物を微量を含有、根痕か)
  - 3, 7.5YR3/4 暗褐色土(しまり中・粘性やや弱、ローム粒大から極大を中量・炭化物を含有、根痕か)
  - 4, 10YR2/3 黒褐色土(しまりやや弱・粘性弱、ローム粒小から中を中量・炭化物を少量含有)
  - 5, 7.5YR2/3 極暗褐色土(しまりやや弱・粘性弱、ローム粒小から中を少量・炭化物を含有)
  - 6, 7.5YR3/2 黒褐色土(しまり中・粘性やや弱、ローム粒大を中量・炭化物粒を少量含有)
  - 7, 10YR2/3 黒褐色土(ローム粒大から極大を中量・炭化物を微量含有)
  - 8, 10YR2/3 黒褐色土(しまりやや弱～中・粘性中、ローム粒大から極大を少量・炭化物を微量含有)
  - 9, 7.5YR3/2 黒褐色土(しまり中～やや強・粘性中～やや強、ローム粒大から極大を少量・炭化物を少量含有)
  - 10, 10YR2/3 黒褐色土(しまりやや弱・粘性中～やや強、ローム粒大から極大を少量・炭化物粒を少から中量・焼土を微量含有)

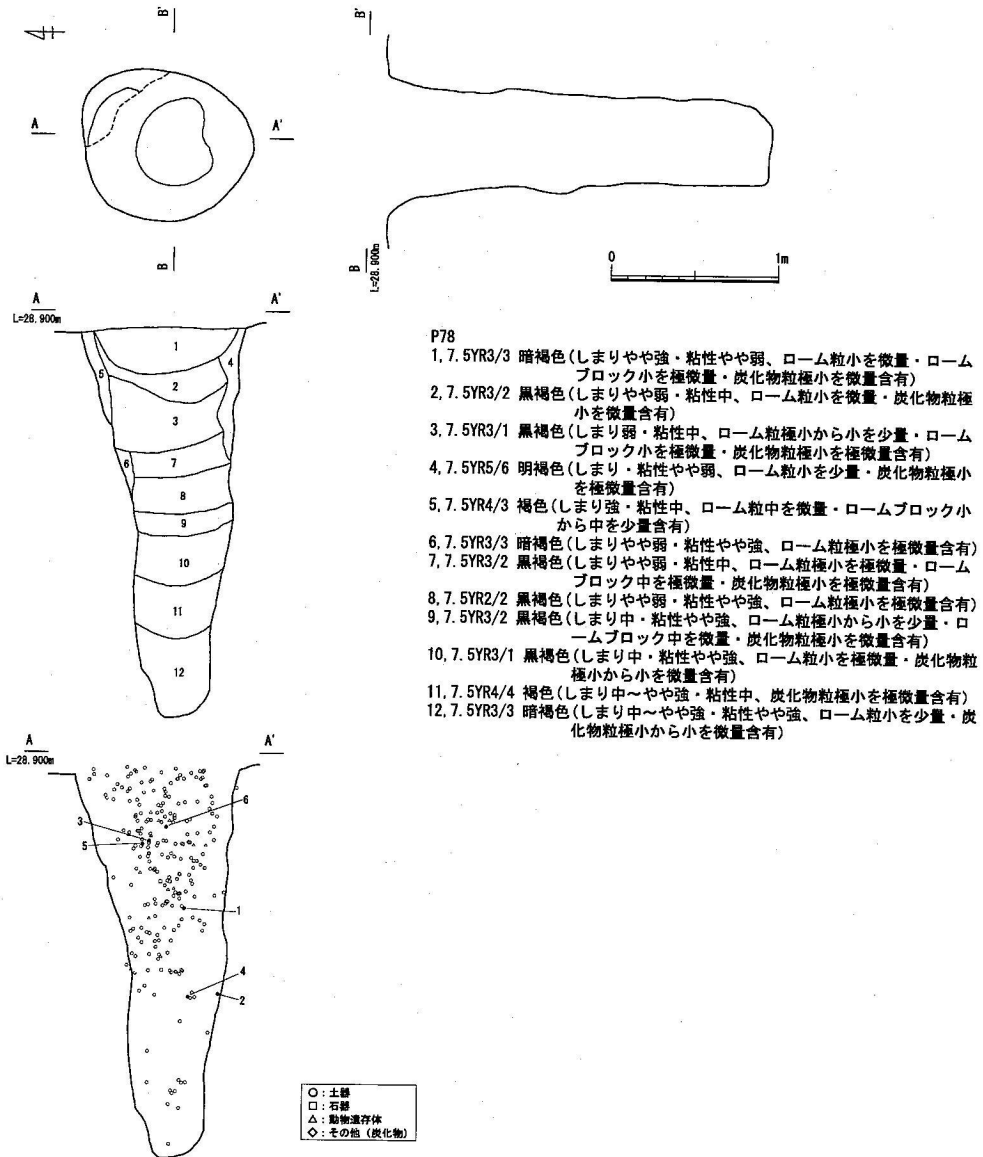


- P108
- 1, 7.5YR4/4 褐色(しまり中～やや強・粘性やや強、ローム粒小から大を微量含有)
  - 2, 7.5YR4/4 褐色(しまりやや強・粘性やや強、ロームブロック中から大を中量含有)
  - 3, 7.5YR4/3 褐色(しまり中・粘性やや強、炭化物を含有)

第4図 検出された土坑 (P56・P107・P108)

10YR2/3で、後述するP101に比べると暗褐色の度合いが強い。出土遺物は中期後葉の加曾利E3式の破片が中央上面付近にまとまって出土した(第6図)。図示した土器以外にも同一個体と考えられる破片が多数出土しており、当該資料がP2に遺棄された可能性が高い。したがって、当該遺構は中期後葉段階に属すると考えられる。

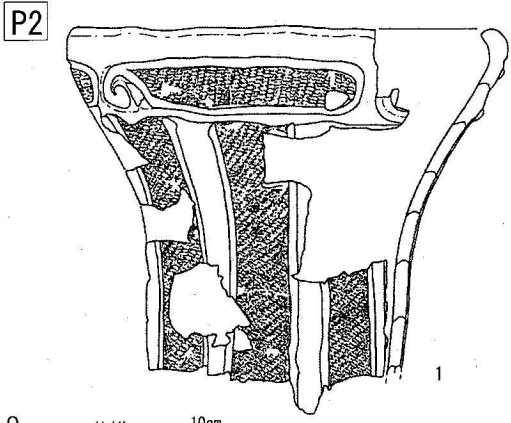
P101は発掘区南東隅において検出された。平面形態は略円形で断面は底面からほぼ垂直に立ち上



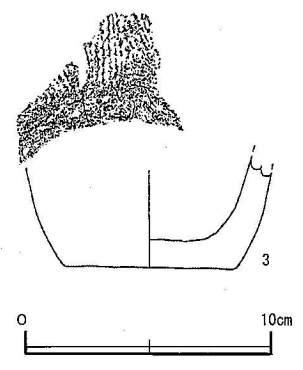
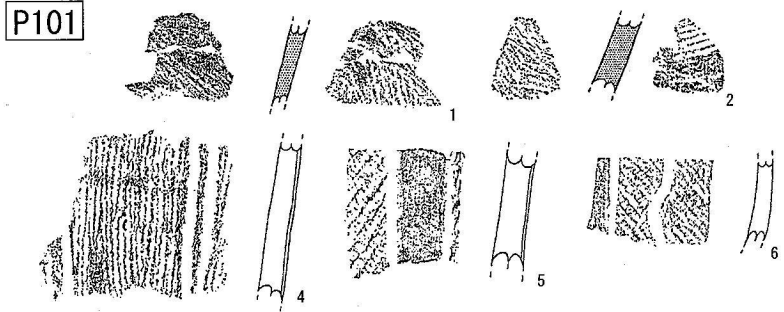
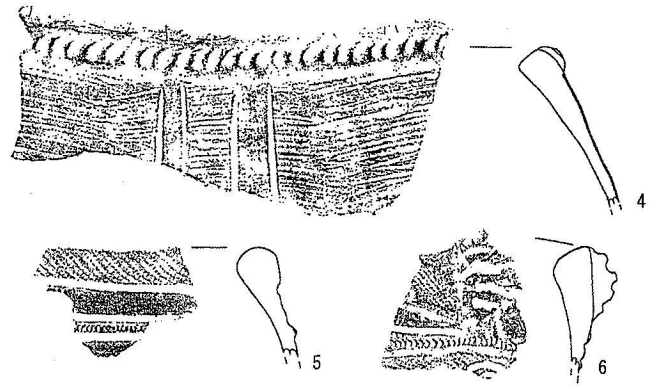
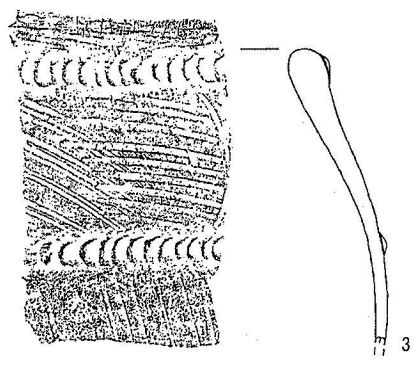
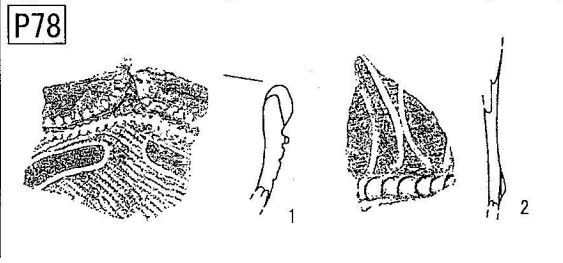
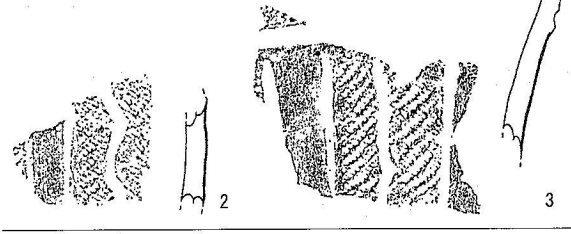
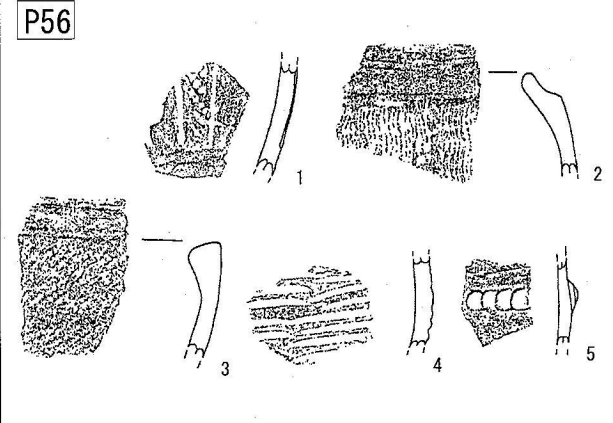
第5図 検出された土坑 (P78)

がる(第3図)。最大径は80cm、底面までの深さは78cmである。確認面での土色は後述するP56やP78、P107と比較して褐色味が強く10YR4/4である。出土遺物は小破片が多く、第3層にやや集中している。中期後葉段階の加曾利E2式～同式期の破片が主に検出された(第6図)。出土遺物からP101は中期後葉段階の所産である可能性が高いと考えられる。

P56は発掘区中央部分からやや南に位置し、C-2yと同wグリッドの境界付近で検出された。同じく今回報告するP108とは東壁が接しており、またP55に一部が切り込まれ、P54に近接する(第4図)。平面形態は東壁が崩落しているが、ややくずれた楕円形を呈すると推定される。断面は底面

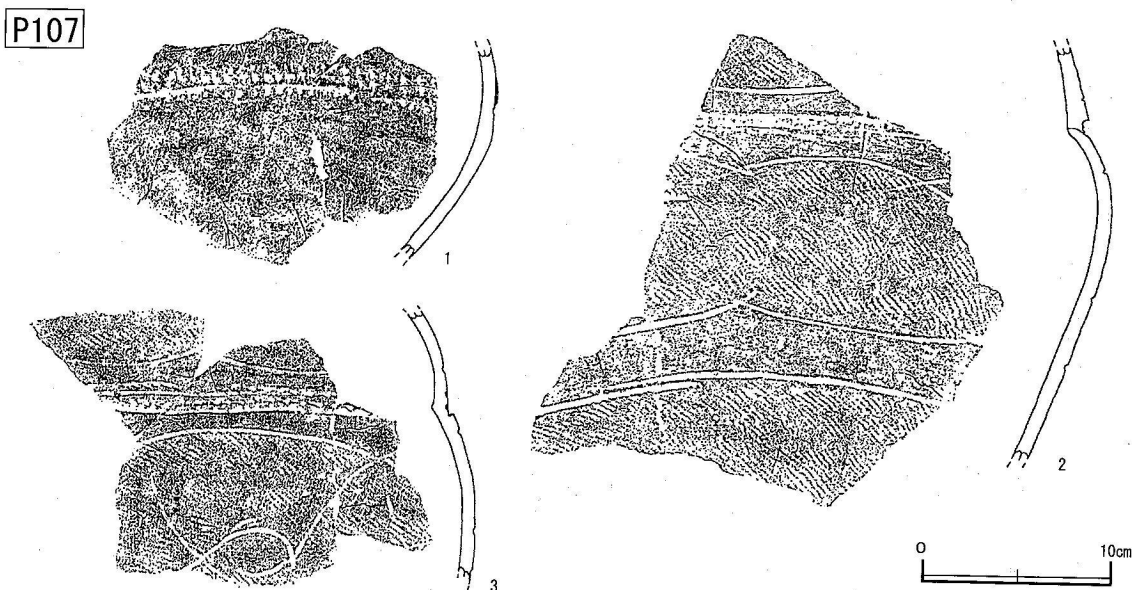


0 (1/4) 10cm



0 10cm

第6図 土坑出土の縄文土器 (1) (P2-1の縮尺は1/4、他は1/3)



第7図 土坑出土の縄文土器 (2) (縮尺 1/3)

から上方へ緩やかに直線的に開く。最大径は66cm、底面までの深さは152cmである。確認面での土色は暗褐色10YR2/3であり、後述するP107やP78に近く、また第2次調査時に後期土坑として検出されたP4に類似する。出土遺物は中期後葉の加曾利E式期、後期後葉の安行式期の破片が出土するが、後期安行式期を中心とする後期後葉段階の土器破片がやや目立って出土した。遺物の多くは第1層、第2層、第3層のいずれも北壁よりにやや偏在するが、目立った傾向は認められなかった。出土遺物からP56は後期後葉段階に比定されると考えられる(第6図)。

P107はP56の東方に近接する。平面形態はくずれた楕円形を呈し断面形は調査途中のため詳述しないが、おそらくP56に近似すると考えられる(第4図)。最大径は65cm、調査時の最下面で145cmを測る。確認面での土色は7.5YR3/2であり、比較的P56などに近い。出土遺物は中期後葉の加曾利E式や併行段階の土器破片や後期後葉の安行式期の土器片であり、後期に属する土器片が多い(第7図)。遺物は第1層、第2層と第9層、第10層から多く検出されている。底面まで調査が進んでいないため不明瞭な点もあるが、当該遺構はP56と同時期の所産である可能性が高い。

P78は発掘区南西に位置する(第5図)。平面形態はくずれた楕円形で、断面は一部屈曲するが底面から上方へなだらかに開く。最大径は102cm、底面までの深さは236cmを測る。今次調査において検出された最も深い土坑である。なお同様の土坑は第2次調査において3基検出されており、うち2基は2006年度発掘区から外れるものの、P78西方に近在する。確認面での土色は暗褐色7.5YR3/3であり、既述のP56、P107に類似し、2005年度概報のP4、P38等に類似する。出土遺物は第1層から第10層まで偏在し10層下方以下の層においては少ない。

第1表 土坑出土の縄文土器(1)

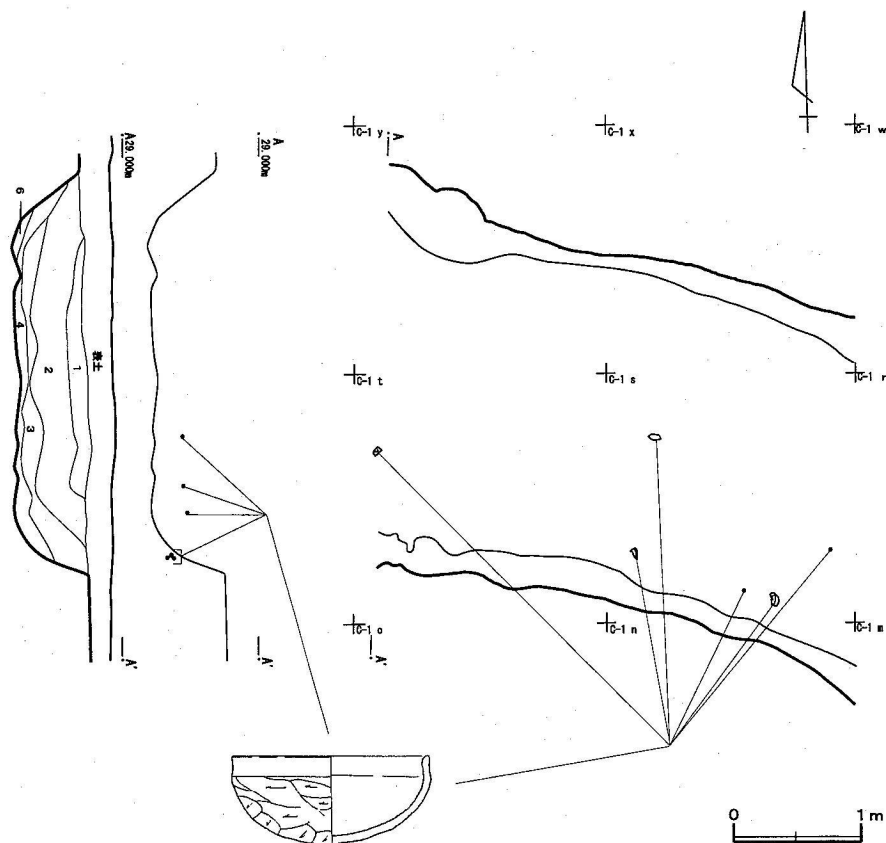
図版	時期 土器型式	器形	部位 残存度	文様の施工工程ほか	器面調整 :(外面) :(内面)	色調 :(外面) :(内面)	胎土	備考
P2-1	中期後葉 加曾利E3式	深鉢: 平縁	口縁部~胴 部中半 1/4	(口縁部)単節縄文RL→断面三角形の隆線による渦巻文→幅約4.5mmの棒状工具を用いた単沈線で楕円形の区画文。沈線の一部は渦巻文をめぐる(胴部)単節縄文RL→幅約4mmの棒状工具を用いた2本一単位の沈線による懸垂文→懸垂文間はナデによる磨消	:横方向の丁寧なナデ	:10YR3/1 :10YR3/3	φ1mm以下の砂を多量、φ1mm以下の白色粒、透明粒を少量。緻密	
2	中期後葉 加曾利E3式	深鉢	胴部	単節縄文RL→幅約4mmの棒状工具を用いた単沈線で蛇行沈線や懸垂文→懸垂文間はナデによる磨消	:横方向のナデ	:10YR3/1 :2.5YR3/2	φ1mm以下の砂を多量、φ1mm以下の白色粒、透明粒を少量。緻密	1, 3と同一個体か
3	中期後葉 加曾利E3式	深鉢	口縁部下端 ~胴部上半	(口縁部)単節縄文RL→幅約7mmの棒状工具を用いた単沈線を横位に巡らす(胴部)単節縄文RL→幅約4mmの棒状工具を用いた単沈線で蛇行沈線や懸垂文→懸垂文間はナデによる磨消	:横方向のナデ	:10YR3/1 :2.5YR3/1	φ1mm以下の砂を多量、φ1mm以下の白色粒、透明粒を少量。緻密	1, 2と同一個体か
P56-1	中期後葉 加曾利E3~ E4式	深鉢	胴部下半	単節縄文LR→幅約3mmの棒状工具を用いた2本一単位の沈線による懸垂文→懸垂文間はナデによる磨消	:不定方向のナデ	:10YR4/3 :10YR2/1	φ2mm以下の砂を多量、φ1mm以下の白色粒、透明粒を微量。緻密	
2	中期後葉 加曾利E3~ E4式	鉢か: 平縁	口縁部~胴 部上半	(口縁部)ナデによる凹線(胴部)7本単位の歯状工具を用いた条線文を縦位や曲線状に施工	:横方向のケズリ・ナデ。口唇内面に陵	:10YR3/1 :7.5YR3/1	φ2mm以下の砂、白色粒を多量、φ1mm以下の透明粒を少量。緻密	
3	中期後葉	深鉢か	口縁部	単節縄文LRを横位に施工	:横方向のナデ。内面肥厚し陵を有する	:7.5Y3/1 :10YR7/3	φ2mm以下の砂、白色粒を多量、φ1mm以下の透明粒を少量。緻密	
4	後期後葉	深鉢	胴部	幅約7.5mmの竹管状工具を用いた平行沈線による条線文	:横方向の丁寧なナデ	:5YR4/4 :7.5YR3/2	φ1mm以下の砂、透明粒を多量。緻密	
5	後期後葉	深鉢	口縁部下端 ~胴部上半	横位の紐線文→不定方向の条線文	:ミガキ	:10YR2/1 :7.5YR2/1	φ1mm以下の砂を多量、φ1mm以下の白色粒、赤色粒、透明粒を少量。緻密	
P78-1	中期後葉 加曾利E4式	深鉢: 小波状	口縁部	断面扁平な隆線で口縁を区画、口縁上方で波頂部を作出→単節縄文LR→隆線内面に刺突による連続する刻み。沈線で楕円形の文様を描き沈線間を磨消	:幅約2.5mmの棒状工具を用いた横方向のミガキ	:10YR2/2 :7.5YR3/2	φ1mm以下の砂、白色粒を多量、φ2mm以下の赤色粒を少量。緻密	
2	後期後葉 加曾利B式	深鉢	口縁部下半	条線文→粘土紐貼付+連続押圧→幅約3mmの棒状工具を用いた沈線文、文様内は磨消	:横方向および斜位の丁寧なナデ	:2.5Y2/1 :10YR3/1	φ1mm以下の砂、白色粒を多量。緻密	
3	後期後葉 加曾利B式	深鉢: 平縁	口縁部~胴 部上半	(口縁部)複数本を単位とする条線文を横位および斜位に施工→口縁上端や下端に粘土紐貼付+連続押圧→幅約3mmの棒状工具を用いた沈線文→沈線間は磨消(胴部)複数本を単位とする条線文を縦位に施工	:横方向の丁寧なナデ複数本の明瞭なナデ痕	:10YR4/2 :10YR4/4	φ1mm以下の砂を多量、φ1mm以下の白色粒、黒色粒、金色粒を少量。緻密	
4	後期後葉 加曾利B式	深鉢: 平縁	口縁部	幅約4mmの平行沈線による条線文→口縁上端に粘土紐貼付+連続押圧→幅約3mmの棒状工具を用いた沈線文→沈線間は磨消	:横方向と斜位のナデが明瞭	:7.5YR3/2 :7.5YR4/4	φ1mm以下の砂を多量、φ1mm以下の白色粒、黒色粒を少量。緻密	
5	晩期前葉 安行3式	深鉢: 波状	口縁部	口縁上方に単節縄文RL、断面扁平の隆線を貼付+連続する刻み→幅約4mmの棒状工具を用いた沈線を口縁上方および隆線内面に巡らす	:口唇はミガキ。口縁内面はナデ	:7.5YR4/4 :7.5YR3/4	φ1mm以下の砂を多量、φ1mm以下の白色粒、黒色粒を少量。緻密	焼成前穿孔あり

第2表 土坑出土の縄文土器(2)

図版	時期 土器型式	器形	部位 残存度	文様の施工程序ほか	器面調整 :(外面) :(内面)	色調 :(外面) :(内面)	胎土	備考
6	晩期前葉 安行3式	深鉢: 波状	口縁部	口縁上方に単節縄文RL→貼り瘤状の突起+棒状工具を用いた3本の沈線→幅約3mmの棒状工具を用いた沈線で区画文。扁平な隆線を貼付+連続した刻み目→単節縄文RL→幅約3mmの棒状工具を用いた沈線で曲線状の文様	: :丁寧なナデ 口縁内面に緩やかな稜	:7.5YR4/3 :7.5YR3/2	φ1mm以下の砂、φ3mm以下の白色粒を多量、φ1mm以下の黒色粒を少量。緻密	
P101-1	早期後葉 条痕文系	深鉢	胴部	無文	:斜位・縦位の 太い条痕 :斜位の太い条痕	:7.5YR5/4 :10YR4/3	縦線を多量、φ2mm以下の砂、白色粒、φ1mm以下の透明粒を少量。やや緻密	
2	早期後葉 条痕文系	深鉢	胴部	無文	:斜位・縦位の 粗い条痕 :横位の太い条痕	:10YR4/2 :7.5YR4/4	縦線を多量、φ1mm以下の砂、白色粒、φ1mm以下の透明粒を少量。やや緻密	
3	中期後葉 加曾利E式 前半	深鉢	胴部下半 ~底部	胴部下半は摺糸L→幅約4mmの棒状工具による単沈線を蛇行して垂下	: :ナデ	:5YR4/6 :7.5YR1.7/1	φ5mm以下の砂、φ3mm以下の白色粒を多量、φ2mm以下の黒色粒、φ1mm以下の透明粒を少量。やや緻密	
4	中期後葉 加曾利E式 前半	深鉢	胴部	摺糸L→幅約4mmの棒状工具を用いた2本一単位の沈線による懸垂文(懸垂文間は地文のつぶれのみ)	: :ナデ	:5YR4/8 :5YR1.7/1	φ5mm以下の砂、白色粒を多量、φ2mm以下の黒色粒、φ1mm以下の透明粒を少量。やや緻密	
5	中期後葉 加曾利E3式	深鉢	胴部	単節縄文RL→幅約3mmの棒状工具を用いた2本一単位の沈線による懸垂文→懸垂文間はナデによる磨消	: :丁寧なナデ	:10YR3/2 :7.5YR4/3	φ3mm以下の砂、φ1mm以下の白色粒を多量、φ3mm以下の黒色粒、φ1mm以下の透明粒を少量。緻密	
6	中期後葉 加曾利E3式	深鉢	胴部	単節縄文LR→幅約3mmの棒状工具を用いた2本一単位の沈線による懸垂文、幅約4.5mmの棒状工具による単沈線を蛇行させ垂下→懸垂文間の地文磨消	: :丁寧なナデ	:2.5Y3/1 :10YR1.7/1	φ1mm以下の砂を多量、φ1mm以下の白色粒、黒色粒、透明粒を少量。緻密	
P107-1	後期後葉 曾谷式か	深鉢	口縁部 下端~胴部 上半	口縁部下端に幅広の微隆起線を貼付→微隆起線上をヘラ状工具により連続刺突	:ハケ状工具に よる横位の粗 い引掻き :ナデ	:2.5Y4/2 :10YR5/3	φ1mm以下の砂、白色粒、黒色粒を多量、φ1mm以下の透明粒を微量。緻密	
2	後期後葉 曾谷式か	深鉢	口縁部下 半~胴部上 半	(口縁部下半)単節縄文RL→幅約2mmの棒状工具による単沈線を腕手状に巡らす→口縁下端と区画内は磨消 (胴部上半)胴部上半はケズリで段差を作ら→単節縄文RL→幅約2mmの棒状工具で単沈線を対弧状に巡らす、胴部上方に幅約2mmの棒状工具で単沈線を巡らす→沈線上下方の連続した刺突、弧状の沈線の上方の磨消	: :丁寧なナデ、 ハケ状工具に よる横方向の 調整	:10YR3/1 :7.5YR3/2	φ1mm以下の砂、白色粒を多量、φ1mm以下の黒色粒、φ3mm以下の赤色粒を微量。緻密	
3	後期後葉 曾谷式か	深鉢	口縁部下端 ~胴部中 半	(口縁部下半)単節縄文RL→幅約2mmの棒状工具で単沈線を巡らす→沈線区画内の磨消 (胴部上半)胴部上半はケズリで段差を作ら→単節縄文RL→幅約2mmの棒状工具による単沈線で入組状の文様、胴部上方は幅約2mmの棒状工具で単沈線を巡らす→沈線の上下方に連続した刺突、区画内の磨消	: :丁寧なナデ、 ハケ状工具に よる横方向の 調整、ヘラ状工 具によるミガキ 磨消	:10YR3/2 :10YR2/2	φ1mm以下の砂、白色粒を多量、φ1mm以下の黒色粒、φ3mm以下の赤色粒を微量。緻密	

出土土器は中期後葉の加曾利E式をはじめ、後期後葉の安行式が検出されているが、安行式期の所産が多数を占めている(第6図)。また、旧石器時代に比定される黒曜石製の縦長剥片が1点出土している。

さらに、P78は他の土坑と比較して、動物骨が多く検出されており、その大半が被熱している。



- 1 7.5YR2/2 黒褐色（しまりやや弱・粘性弱、ローム粒極小を微量・炭化物粒極小を極微量含有）
- 2 7.5YR2/2 黒褐色（しまり中・粘性中、ローム粒小を少量・炭化物粒極小を極微量含有）
- 3 7.5YR3/2 黒褐色（しまり中・粘性中、ローム粒極小～中を中量・焼土粒極小を極微量含有）
- 4 7.5YR3/3 暗褐色（しまりやや強・粘性やや強、ローム粒極小を少量・ロームブロック大～極大を多量・焼土粒極小を極微量・炭化物粒極小を極微量含有）
- 6 7.5YR3/3 暗褐色（しまりやや強・粘性やや強、4層よりローム粒少ない）

第8図 溝状遺構の一部拡大と出土土師器の接合関係

いずれも小片なため動物種の特定には至らないものの、これまでに少なくともクロダイ属の前上顎骨を1点同定した。土壌のフローテーションと同定作業は現在も継続中であり今後更なる種の同定と追加が見込まれる。P78の所属時期は、遺物の出土傾向から他の土坑と同様に後期後葉段階に属する可能性が高い。（井出浩正・大網信良）

## ②溝状遺構

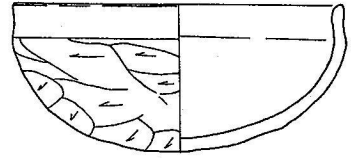
幅2.74mの溝状遺構は、調査区の北西端から南東方向へ向かって長さ約5.66mにわたり、弧状にめぐる（第8図）。前回の第2次調査では、遺構の立ち上がりと断面形態の把握を目的として南北方向にトレンチ1を、全体の形態把握のために東西方向にトレンチ2を設定し、調査した。その結果、縄文時代よりも新しい遺構である可能性が浮上した。ただ2本のトレンチから出土した遺物の大多



数が縄文時代後期から晩期の土器片であり、遺構の時期判断は今次の調査に持ち越された。

第3次調査では、トレンチ1を拡張して断面形態と土層の堆積状況を確認した後、確認された5層を基準として各層ごとの掘り下げを面的におこなった。遺構確認面からの深さは最も深い西端で57cm、浅い東端で29cmであった。また、調査区西端の断面では5層確認された堆積層が、約5.6m離れた東端では3層以下の堆積のみが遺存していることが確認され溝状遺構の底面の標高値は、調査区の西端と東端で約50cmの差があった。調査区西端から東端にかけては、現在でも緩やかに傾斜しており、溝状遺構の堆積状況と底面の高低差は、当時も同様の地形であったことを示唆している。

出土遺物は、ほとんどが縄文時代の土器だが、この遺構が縄文時代以降に帰属するものである可能性を示す遺物が1個体出土している（第9図）。ほぼ完形に復元されたこの土師器の坏は、口径13.2cm、器高6.0cmで、底部に3本の条線が施されているのが特徴的である。坏は完形で出土したのではなく、破片はC-1t、C-1sグリッドの範囲で出土した。出土層位は2層の中でも下の方で、底面から24cmほど浮いた位置だが、比較的まとまっており、割れた状態で一括廃棄されたか、または廃棄された際に壊れたものと思われる。器形から、古墳時代中期後半から後期のものと考えられる。なお、明らかに古墳時代の遺物と判断されるものは、調査区全体でみても数点のみであり、この土師器の坏を除けばすべて小破片である。

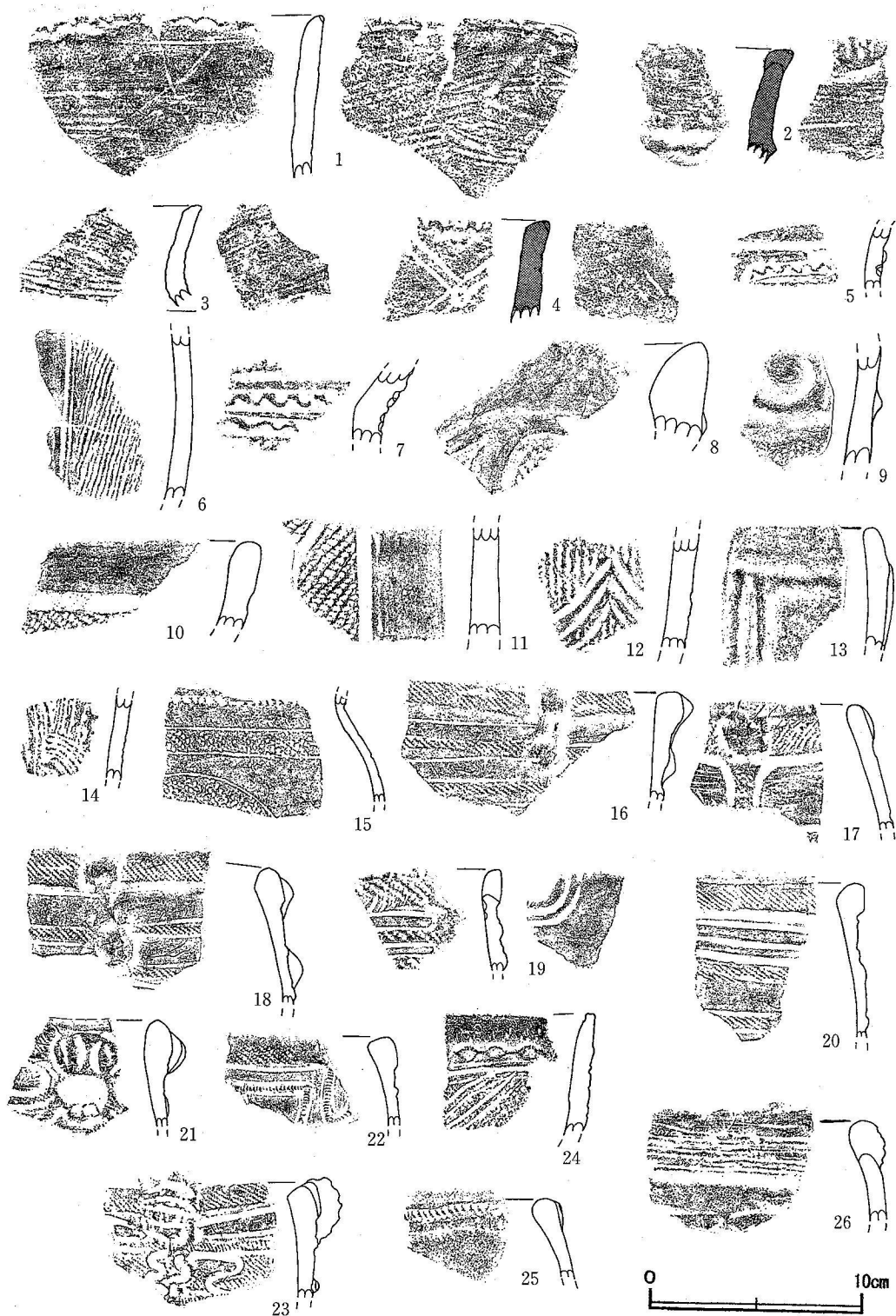


第9図 溝状遺構出土土師器

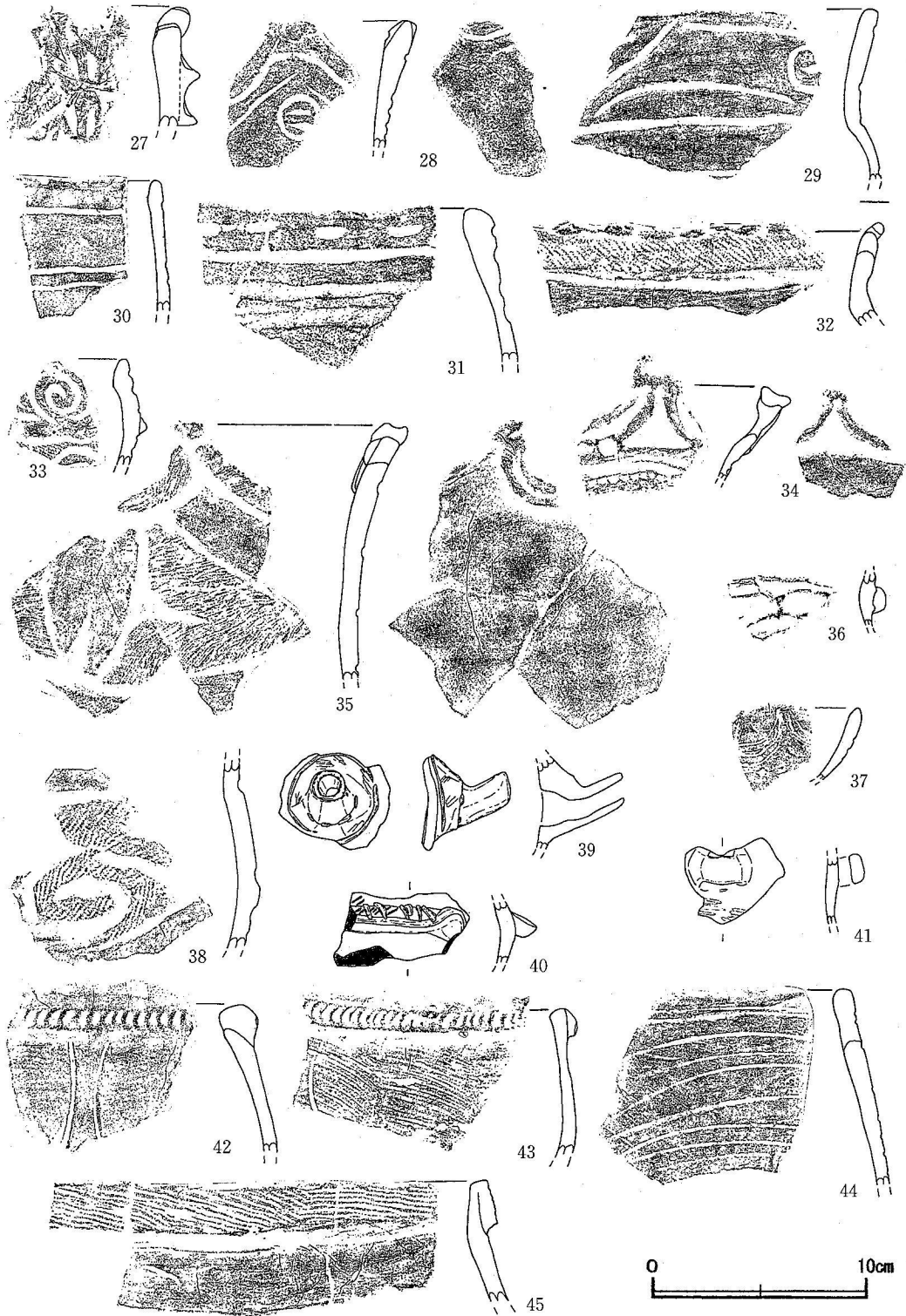
（菊地有希子）

### ③溝状遺構出土の縄文土器

今回の調査で検出された溝状遺構からは、縄文時代早期、中期～晩期にわたる縄文土器が出土した。今回報告する縄文土器は48点である（第4～6表、第10～12図）。早期は条痕文系土器が出土しており、胎土に繊維を含むもの、含まないものがみられる。中期は初頭の五領ヶ台式が少数出土し、後葉の加曾利E式、いわゆる連弧文土器、後葉併行期が出土しているが、なかでも加曾利E3式期以降の破片が多出している。後期は後葉段階まで僅少であり、曾谷式が少量、安行式が多量に出土している。この傾向は前年度までの調査成果と同様である。晩期は前葉の安行3a式～末葉の千網式まで検出された。安行式および姥山式が数量的に目立つ。遺物は微小破片を除いて、遣り方測量、及び光波測距儀によってドット上げを行い、計1746点にのぼる。一方、時期別の分布をみると、晩期の土器が全体の67%を占め、次いで後期、中期、早期の順となる。



第10図 溝状遺構出土の縄文土器(1) (縮尺1/3)

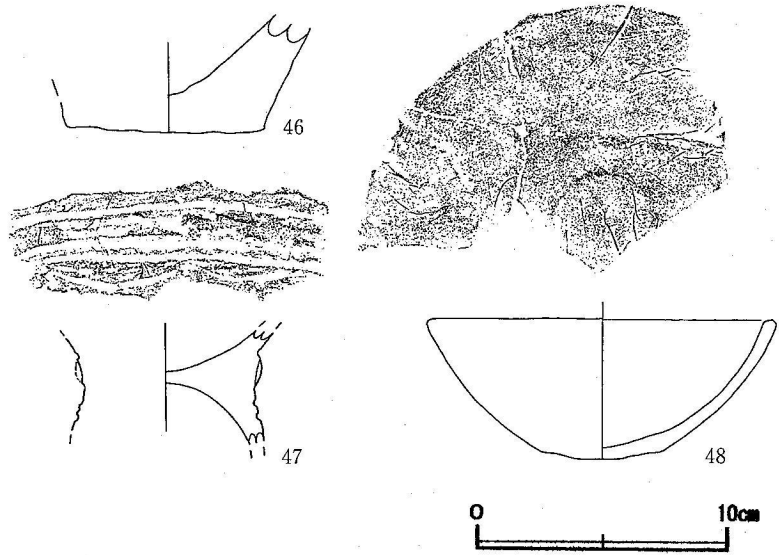


第11図 溝状遺構出土の縄文土器 (2) (縮尺 1/3)

平面分布では、C-1m、s、tに濃密な分布がみられ、これらのグリッドに隣接する溝状遺構の南側のC-1n、oにおいても、晩期の土器が集中して散布している状況が確認されている。これは、後述する縄文時代晩期の住居跡推定の遺構を破壊して溝状遺構が構築されたと考えるのが妥当であろう。

一方、多数を占める縄文時代の遺物は、2005年度のトレンチ調査時の出土遺物でもすでに認められていたように、縄文時代中期から晩期のもがあり、なかでも縄文後期後葉の安行式期から晩期の土器群が多数を占めていた。溝状遺構から出土した縄文土器について、グリッド別の土器破片数および時期別の出土傾向を示すと第3表のようになる。なお、表に掲げた破片数は、型式学的に時期判定が可能な破片を抽出しており、出土総数ではない。

第3表によれば、今次調査における当該遺構からは早期、中期、後期、晩期の資料が検出されており、特に晩期土器片が全体の約7割を占めていることが分かる。また、当該遺構の中でも、特にC-1m、s、tからの出土遺物量が多く、これらに占める晩期土器片も極めて多いことが分かる。この点から、当該遺構南側に切られる形で残存する遺構との強い関係が窺える。現段階では、これは形状や規模、そして出土遺物から縄文時代晩期の住居跡と想定される。(井手浩正・中門亮太)



第12図 溝状遺構出土の縄文土器(3)(縮尺1/3)

第3表 溝状遺構出土遺物のグリッド別出土土数(縄文土器のみ)

グリッド	早期	中期	後期	晩期	計
C-1g	0	0	2	8	10
C-1l	1	11	2	23	37
C-1m	4	10	11	91	116
C-1n	1	7	3	25	36
C-1q	1	2	0	3	6
C-1r	5	7	7	52	71
C-1s	2	26	24	97	149
C-1t	1	17	21	55	94
C-1w	0	0	0	1	1
C-1x	0	11	8	48	67
C-1y	1	3	8	18	30
サブトレ2	2	20	10	46	78
計	18	114	96	467	695

第4表 溝状遺構出土の縄文土器(1)

図版	グリッド	時期 土器型式	器形	部位 残存度	文様の施文工程ほか	器面調整 (外面) (内面)	色調 (外面) (内面)	胎土	備考
1	C-1r	早期後葉 条痕文系	深鉢	口縁部	口唇に幅約5mmの棒状工具による刻み	:条痕 :条痕	10YR2/2 10YR5/4	φ2mm以下の石英 粒を多量。緻密	
2	C-1y	早期後葉 条痕文系	深鉢	口縁部	口唇に幅約3mmの棒状工具による刻み、 口縁下部に断面三角形の隆起線を横位に 巡らせる	:条痕 :条痕	7.5YR5/6 10YR6/6	繊維を少量、φ0.5 mm以下の石英粒、 φ0.1mm以下の白 色粒子。緻密	
3	C-1n	早期後葉 条痕文系	深鉢	口縁部	無文	:条痕 :条痕	10YR3/3 10YR5/4	φ0.5mm以下の石 英粒を少量。緻密	
4	C-1r	早期後葉 条痕文系	深鉢	口縁部	口縁部は幅約6mmの平行沈線で「×」字状 の文様を描き、交点に円形の刻突、口唇に 幅約3mmの棒状工具を用いた連続する刻み 目	:ナデ :強めのナデ	10YR5/3 7.5YR5/6	繊維を少量、φ2 mm以下の砂、φ0.5 ミリ以下の石英粒 を含む。緻密	
5	C-1x	中期初頭 五領ヶ台式	深鉢	胴部	断面半円形の隆帯を貼付→隆帯上に幅約 2mmの棒状工具を用いた沈線を沿わせ、隆 帯下に同様の工具を用いた交互刻突を施す	:ミガキ :ミガキ	5YR4/8 5YR5/6	φ0.1mm以下の雲 母片、φ3mm以下 の焼土粒を含む。 緻密	
6	C-1l C-1m	中期後葉 加曾利E3式 前半	深鉢	胴部	縦糸L→幅約2mmの棒状工具を用いた2本 の沈線による懸垂文	:縦方向のナ デ :縦方向のケ ズリ、ナデ	10YR3/1 10YR5/4	φ0.1mm以下の白 色粒を含む。緻密	
7	C-1	中期後葉 加曾利E3式 前半	深鉢	胴部	幅約6mmの棒状工具を用いた沈線を横位に 巡らせる→同様の工具による交互刻突を2 段巡らせる→単節縄文RL	: :ナデ	10YR5/6 10YR6/4	φ1mm以下の石英 粒を少量。緻密	
8	C-1t	中期後葉 加曾利E3式	深鉢	口縁部	断面半円形の隆帯貼り付けにより、曲線的 な区画→区画内に単節縄文RLを充填	:ナデ :ナデ	10YR7/4 10YR7/4	φ0.1mm以下の白 色粒を少量、φ1 mm以下の石英粒を 微量。緻密	
9	C-1s	中期後葉 加曾利E3式	深鉢	胴部	単節縄文RL→断面三角形の隆帯を渦巻き 状に貼付	:ナデ :ナデ	7.5YR5/8 10YR5/6	φ0.1mm以下の石 英粒、白色粒。緻 密	
10	C-1r	中期後葉 加曾利E3式	深鉢	口縁部	単節縄文RL→幅約9mmの棒状工具を用い た太い沈線を口縁に沿って巡らせる	:丁寧なナデ :丁寧なナデ	7.5YR6/8 10YR6/8	φ1mm以下の砂を 含む。緻密	
11	C-1s	中期後葉 加曾利E3式	深鉢	胴部	単節縄文RLを縦位に施文→幅約7mm棒状 工具による沈線を2本垂下→沈線間の磨消、 同様の工具による蛇行沈線	:沈線間に丁 取なナデ :ナデ、ミガキ	10YR6/6 10YR6/4	φ0.1mm以下の雲 母片を微量。緻密	
12	C-1t	中期後葉 連弧文	深鉢	胴部	縦糸L→幅約4mmの棒状工具による3本一 単位の連弧文→(連弧文間は地文のつぶれ)	:ナデ :丁寧なナデ	10YR6/4 5YR4/4	φ1mm以下の石英 粒、砂、φ5mm以 下の焼土粒。緻密	
13	C-1r	後期前葉	深鉢	口縁部	口縁上方に微隆起線を横位に巡らせる→2 本の微隆起線を垂下	:	10YR6/4 10YR6/4	φ0.1mm以下の雲 母片を少量、φ2 mm以下の砂。緻密	
14	C-1s	後期前葉 堀之内式	深鉢	胴部	幅約12mmの5本単位の棒状工具を用いた 条線	:	10YR3/2 10YR3/4	φ0.1mm以下の石 英粒、白色粒。緻 密	
15	C-1s	後期後葉 曾谷式	深鉢	胴部	頸部は「く」の字状に括れ、胴に幅約3mmの 棒状工具による連続する横位の刻突が巡る 胴部は幅約3mmの棒状工具を用いた2本の 沈線を横位に巡らせ区画し、文様を描く→沈 線間は単節縄文RLを充填	:ケズリ、ミガキ :横方向の丁 取なナデ	10YR5/4 10YR5/4	φ1mm以下の石英 粒、白色粒子、雲 母片。緻密	
16	C-1n	後期後葉 安行1式	深鉢	口縁部	肥厚する口縁上端や微隆起線上に単節縄 文RL→貼り瘤→口縁下端や微隆起線の両 脇に幅約2mmの棒状工具を用いた沈線	:ミガキ :横方向の丁 取なナデ	10YR4/6 10YR4/6	φ0.1mm以下の白 色粒、雲母片。緻 密	
17	C-1t	後期後葉 安行1式	深鉢	口縁部	単節縄文LR→口縁上端に粘土粒貼付→口 縁下部を磨消→幅約5mmの棒状工具を用い た沈線で窓枠状の区画	:ケズリ :横方向の丁 取なナデ	5YR4/4 7.5YR4/6	φ2mm以下の砂、 φ0.1mm以下の雲 母片。緻密	

第5表 溝状遺構出土の縄文土器(2)

図版	グリッド	時期 土器型式	器形	部位 残存度	文様の施文工程ほか	器面調整 (外面) (内面)	色調 (外面) (内面)	胎土	備考
18	C-1n	後期後葉 安行1式	深鉢	口縁部	肥厚する口縁上端や微隆起線上に単節縄文RL→貼り瘤→微隆起線の両端や磨消部に幅約2mmの棒状工具を用いた沈線を巡らせる	:ナデ :横方向の丁寧なナデ	10YR6/4 5YR5/6	φ0.1mm以下の雲母片を多量に含む。緻密	
19	C-1t	後期後葉 安行2式	深鉢	口縁部	単節縄文RL→幅約2mmの棒状工具を用いた窓枠状の文様を2段施す。内面は同様の工具を用いた2本の沈線が口唇を巡る口縁はスリットを有する	:ミガキ :ミガキ	7.5YR4/3 5YR2/3	φ0.1mm以下の白色粒を多量、φ0.1mm以下の石英粒を微量。緻密	
20	C-1s	後期後葉 安行2式	深鉢	口縁部	口縁上下に単節縄文RLの帯縄文→帯縄文間にミガキを施し、幅約4mmの棒状工具を用いた沈線を横位に数本巡らせる	:ミガキ :丁寧なナデ	10YR6/4 10YR3/3 ~5/6	φ1mm以下の雲母片、φ3mmの焼土粒。緻密	
21	C-1r	後期後葉 安行2式	深鉢	口縁部	単節縄文RL→楕円形の粘土粒を貼付+幅約3mmの棒状工具を用いた2本の沈線胴部は断面扁平な隆線による区画→隆線上に単節縄文RL→隆帯瘤や単独に、同様の棒状工具による沈線で文様を描く→豚鼻状の貼付	:ミガキ :横方向のミガキ	10YR6/6 10YR5/4	φ0.1mm以下の石英粒、白色粒。緻密	
22	C-1s	後期後葉 安行2式	深鉢	口縁部	口縁上端に単節縄文RL→断面扁平の細い隆線を貼付による区画+隆線上にへら状工具を用いた刻み→口縁下端、及び隆線脇に幅約2mmの棒状工具を用いた沈線	:ミガキ :丁寧なナデ	5YR5/8 10YR4/6	φ1mm以下の白色粒、チャート粒を微量。緻密	
23	C-1s	後~晚期 安行2~ 3a式	深鉢	口縁部	口縁上端、下方に単節縄文RL→断面扁平の粘土紐貼付、粘土紐上にへら状工具を用いた刻みを充填→口縁下端や微隆起線の両脇に幅約4mmの棒状工具を用いた沈線→同様の沈線で曲線的な文様→口縁部に同様の工具を用いた押圧を有する縦長の貼り瘤、その下に豚鼻状の貼付	:ミガキ :ミガキ	7.5YR3/3 5YR3/6	φ2mm以下の赤色粒を少量、φ0.5mm以下の白色粒。緻密	
24	C-1l	後期前葉	深鉢 :粗製	口縁部	口縁部に粘土紐貼付→粘土紐に押圧を施す→単節縄文LR→幅約2mmの棒状工具による横位区画、同様の工具による斜位の条線 同様の工具による沈線を口端、内面に施す	: :丁寧なナデ	2.5YR4/6 2.5YR4/6	φ0.1mm以下の雲母片、白色粒子を多量に含む。緻密	
25	C-1x	後期中葉	深鉢 :粗製	口縁部	口縁上端に粘土紐の貼付+爪形状の連続する刺突	:ナデ :ナデか	5YR4/6 7.5YR4/2	φ1mm以下の雲母片、φ2mm以下の砂を多量。緻密	
26	C-1t	後期中葉	深鉢 :粗製	口縁部	肥厚する口縁上方に幅約5mmの平行沈線を横位に数本巡らせる	: :横方向のナデ	10YR3/1 10YR6/6	φ0.1mm以下の石英粒、雲母片を少量、φ3mm以下の砂、φ1mm以下の白色粒。緻密	
27	C-1m	晚期前葉 安行3a式	深鉢 :波状	口縁部	波頂部に二股の突起を作出し、突起上に幅約4mmの棒状工具による刻み→単節縄文LR→突起下に粘土粒を貼付+同様の工具を用いた沈線→口縁に同様の工具を用いた2本の沈線	:ナデ :横方向のケズリに近いナデ	10YR6/4 10YR6/4	φ0.5mm以下の雲母片。緻密	
28	C-1l	晚期前葉 蛇山2式	深鉢 :波状	口縁部	幅約3mmの棒状工具を用いた沈線で口縁を巡らせ、同様の工具による円文+ひし形の文様 波頂部に粘土を貼付、内面に同様の工具を用いた沈線	:丁寧なナデ :丁寧なナデ	10YR5/4 10YR6/6	φ1mm以下の白色粒、雲母片。緻密	
29	C-1s	晚期前葉 蛇山2式	深鉢	口縁部	幅約3mmの棒状工具を用いた沈線を口縁上方及び下端に巡らせ区画し、同様の沈線で弧線文や円文	:ミガキ :丁寧なナデ	2.5YR4/8 2.5YR5/8	φ1mm以下の雲母片、砂。緻密	
30	C-1s	晚期前葉 蛇山2式	深鉢	口縁部	幅約3mmの棒状工具を用いた沈線による枠状文	:ケズリ :丁寧なナデ	10YR3/1 10YR3/3	φ0.1mm以下の石英粒、雲母片。緻密	
31	C-1g	晚期前葉 蛇山2~3式	深鉢	口縁部	口縁上端は幅約8mmの棒状工具を用いた列点 口縁下部は同様の工具を用いたための沈線で文様を描く	:ケズリ :ナデ	10YR3/1 10YR4/2	φ1mm以下の石英粒を多量、φ1mm以下の赤色粒。緻密	
32	C-1l	晚期前葉	深鉢か	口縁部	肥厚する口縁下端に幅約5mmの棒状工具を用いた横位の沈線→単節縄文RL→口唇に粘土紐の貼付によるB突起	:ミガキ :丁寧なナデ、ミガキ	5YR3/2 2.5YR4/6	φ1mm以下の砂、白色粒を多量、φ0.1mm以下の雲母片を少量。緻密	広口壺の可能性あり

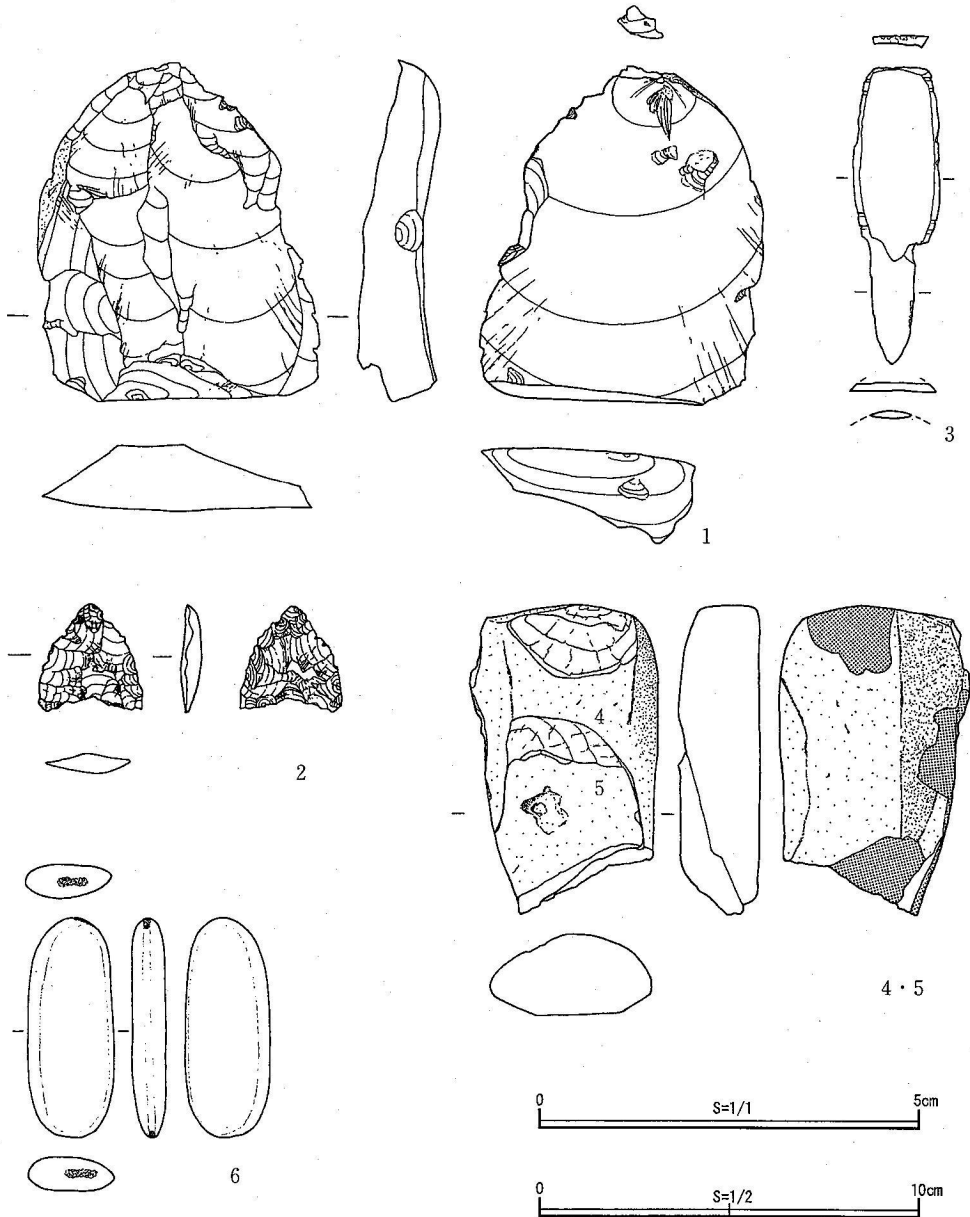
第6表 溝状遺構出土の縄文土器(3)

図版	グリッド	時期 土器型式	器形	部位 残存度	文様の施文工程ほか	器面調整 (外面) (内面)	色調 (外面) (内面)	胎土	備考
33	C-1s	晩期前葉 埴山2~3式	深鉢 :波状	口縁部	単節縄文RL→粘土粒貼り付けによる貼り瘤→貼り瘤の上下に幅約3mmの棒状工具を用いた沈線→同様の工具で「の」の字状文様	:ナデ、ミガキ :ミガキ	10YR6/4 7.5YR4/6	φ0.1mm以下の白色粒子を少量。緻密	
34	C-1l	晩期前~ 中葉	鉢か	口縁部	波頂部には粘土紐の貼付と陰刻による三叉状の文様を施し、口縁に沿って幅約4mmの棒状工具を用いた沈線が巡る。口縁下方に同様の工具を用いた沈線、沈線下に同様の工具で刺突列 波頂には粘土紐を貼付、円形の押圧、内面は陰刻による三叉状の文様	:丁寧なナデ、 ミガキ	10YR7/4 10YR6/4	φ1mm以下の石英粒を微量、φ1mm以下の雲母片、砂。緻密	壺の可能性あり
35	C-1m C-1n	晩期前葉 埴山2~3式	深鉢 :波状	口縁部	口端に短い粘土紐を弧状に貼付+幅約5mmの棒状工具を用いた1本の沈線 波頂部は粘土紐を巻きつけた突起→内面は同様の工具を用いた1本の沈線、突起上には円形の刺突 胴部は単節縄文LR→同様の工具を用いた沈線による文様	:ミガキ :横方向の丁寧なナデ	2.5YR5/6 ~4/4 10YR2/1	φ1mm以下の砂を少量、φ0.1mm以下の白色粒、雲母片。緻密	
36	C-1s	晩期	壺	頸部	幅約4mmの棒状工具を用いた沈線、つまみ上げて作出した突起による工字文	:ミガキ :ケズリ	10YR2/1 7.5YR6/8	φ1mm以下の石英粒、白色粒。緻密	
37	C-1t	後~晩期	鉢 :ミニ チュア	口縁部	幅約1mmの棒状工具を用いた3本の弧状の沈線	:ナデ :ナデ	10YR5/2 ~3/1 10YR5/2	φ0.1mm以下の白色粒、雲母片。緻密	
38	C-1m	晩期中葉 前浦式	深鉢	胴部	単節縄文LR→幅約6mmの棒状工具を用いた沈線による「の」の字状文様	:ミガキ :ケズリ	10YR3/1 7.5YR4/4	φ0.5mm以下の石英粒、雲母片、白色粒子を多量。緻密	
39	C-1s	晩期	注口	注口部	幅約3mmの棒状工具を用いた沈線、注口の貼り付け部を押さえる→注口部の周りに同様の工具を用いた刺突を巡らせる	:ナデ、ミガキ :ナデ	5YR6/8 10YR5/3	φ1mm以下の石英粒を少量。緻密	
40	C-1t	晩期前葉 安行3a式	浅鉢	胴部	粘土を鐮状に貼付→貼付上部に単節縄文LR+幅約4mmの棒状工具を用いた刻み	:ミガキ :ナデ	10YR3/2 10YR3/3	φ1mm以下の白色粒。緻密	
41	C-1n	不明	不明	把手	幅約1cmの粘土紐による環状の把手	:ミガキ :ナデ	10YR5/4 10YR2/1	φ1mm以下の石英粒、砂。緻密	赤色顔料付着
42	C-1t	晩期安行 紐線文	深鉢 :粗製	口縁部	口縁上端に粘土紐を貼付+右方向から連続押圧→幅約2mmの棒状工具を用いた沈線で区画→区画間を磨消	:横位のナデ、 区画間のミガキ :丁寧なナデ、 一部ミガキ	7.5YR6/6 5YR6/8	φ0.1mm以下の白色粒、雲母片。緻密	
43	C-1l	晩期安行 紐線文	深鉢 :粗製	口縁部	口縁上端に粘土紐を貼付+右方向から連続押圧。胴部は横位から斜位の条線文→幅約2mmの棒状工具を用いた沈線文	:口縁上端ミガキ :横方向の丁寧なナデ	10YR2/1 10YR6/4 ~2/2	φ0.1mm以下の雲母片。緻密	
44	C-1s	晩期前葉 埴山式	深鉢 :粗製	口縁部	幅約2mmの棒状工具を用いた弧状の条線	:丁寧なナデ :強めのナデ	10YR4/3 10YR5/3	φ1mm以下の石英粒、チャート粒を少量、φ0.1mm以下の雲母片を多量。緻密	口唇やや肥厚
45	C-1m C-1r	晩期末葉 千網式	深鉢 :粗製	口縁部	折り返しにより、口縁部に段を作出→縷糸R	:丁寧なナデ :ケズリ	7.5YR5/6 10YR6/4	φ1mm以下の砂を少量含。緻密	
46	C-1m C-1r C-1s	中期	深鉢	底部	無文	:ケズリ、ナデ :ケズリ	5YR4/4~ 4/8 7.5YR3/2	φ1mm以下の石英粒、砂、φ0.5mm以下の雲母片を多量。緻密	
47	C-1s	後~晩期	台付鉢	器台部分	断面扁平の隆線+脇に幅約3mmの棒状工具を用いた沈線→同様の工具で連続する弧状の文様、文様内に列点文	:ナデ :ナデ、ケズリ	10YR7/4 10YR4/2	φ0.5mm以下の石英粒を微量、φ1mm以下の赤色粒子、白色粒。緻密	
48	C-1n C-1r	後~晩期	浅鉢	全体の約1/3 残存	ケズリによる器面調整が認められる	:ケズリ :丁寧なナデ	10YR2/3 10YR3/4	φ1mm以下の石英粒、白色粒を多量、φ0.1mm以下の雲母片を少量。緻密	

## ④第3次調査で検出された石器

第3次調査で検出された石器・石製品は微細な剥片まで含めると、総計141点である。本稿では紙面の都合上、溝状遺構出土資料を中心に5点掲載した。

1は旧石器時代に比定される縦長剥片である。正面・裏面ともに一部に礫面が見られ、礫面に近い剥片と思われる。正面において左右・上下方向から入念に調整を行ったうえで剥離している。正面



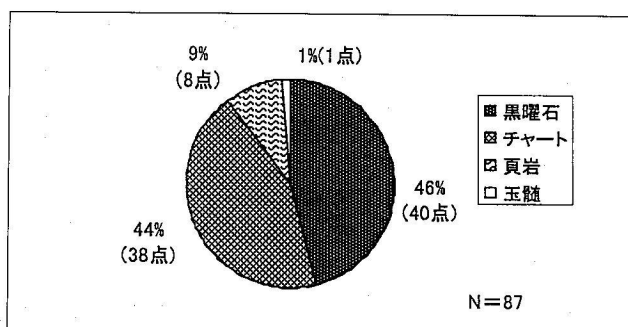
第13図 第3次調査出土の石器・石製品 (1・2の縮尺は1/1、3~6は1/2)



第7表 第3次調査出土の石器・石製品

No.	器種	出土地	石材	法量				備考
				長さ	幅	厚さ	重量	
1	縦長剥片	P78	黒曜石	45mm	37mm	11mm	16.6g	末端欠損
2	石鏃	溝状遺構 (C-1t)	チャート	14mm	14mm	3mm	0.5g	完形、凹基無茎
3	石棒	溝状遺構 (C-1t)	粘板岩	79mm	23mm	2mm	5.3g	節理面に沿って欠損
4	砥石か	溝状遺構 (C-1n)	砂岩	78mm	50mm	22mm	93.5g	下半部欠損
5	砥石か	C-1n	砂岩	43mm	40mm	18mm	16.0g	4と接合
6	敲石	溝状遺構 (C-1s)	頁岩	58mm	23mm	9mm	19.9g	上下の端部に敲打

下半部は光沢がなく、同一剥離面でも光沢がある部分とない部分が存在する。2は凹基無茎石鏃である。全体的に正三角形に近い形態で、断面はレンズ状を呈する。なお、図示していないが、玉髓製の有茎石鏃も1点出土している。



第14図 剥片類の石材別使用状況

3は後期に比定される石棒である。約2mmの厚さで節理面に沿って板状に

欠損している。頭部の上・下部に沈線状の陰刻が2本ずつ施されている。表面はよく磨かれており、特に下半部では擦痕が顕著に認められる。先端部には敲打痕も見られるが、これは研磨の前段階のものと考えられる。4と5は同一個体の接合資料である。正面・裏面ともに研磨面が存在していることから砥石と判断した。残存部位から隅丸方形に近い形態が予想されるが、中央部付近から左側がすぼまるように狭くなる不規則な形態である。裏面は若干赤みを帯びており、正面に比べ、所々表面が剥げ（トーン貼付部分）、ざらついている。ただし、正面下半部には1箇所凹みが見られ、石斧など砥石以外の用途も考えられる。6は、上下の端部に敲打痕があることから敲石とみなした。

最後に石材について概略する。遺物全体では黒曜石・チャートが40点と最も多く、他に、緑泥片岩、頁岩や玉髓などの石材が使用されている。剥片類（剥片石器・剥片のほか碎片も含む）を石材別に見ても、黒曜石とチャートが主体的に用いられている（第14図）。

今回出土した資料のうち、有茎石鏃や石棒に限れば、戸ノ内貝塚の中心的な時期と大きな相違のない結果が出ている。今後も、来期調査予定である住居跡推定遺構の出土遺物を中心に継続的に分析を行いたい。

(新海達也)

#### 4. 第3次調査の成果と課題

##### ①成果

###### 【溝状遺構】

今次の戸ノ内貝塚調査の大きな成果の一つと位置づけられる。第2次調査段階では遺構の立ち上がりの一部と遺構全体の確認にとどまっていたが、今次調査によって、溝状遺構のほぼ全容を捉えることができた。それらについては既述の通りであるが、当該遺構が周溝の一部であり、出土遺物から古墳時代中期から後期に位置づけられることが判明した。今後は遺構内から検出された多数の土坑と当該遺構との関連性の解明や、既に削平されたと考えられる墳丘の形状、規模や容積等を検討したい。また、2007年度以降も引き続き、発掘区における同時併存した他の遺構の検出を併行させてゆく予定である。

###### 【土坑】

土坑は今次の調査によって、新たに約100基を確認することができ、第2次調査時の確認・発掘した土坑を合わせると174基を数えた。そのうち今後は8基の発掘調査を行った。これらのうち、今報告ではP2、P101、P56、P107、P78を取り上げた。これらは今次調査によって発掘が行われた他の土坑の様相をよく示しており、また第1次、第2次調査の発掘成果と概ね歩を一にするといえる。

これまで本学が発掘調査を進めてきた発掘区には、多くの土坑群が埋蔵されていることが判明し、それらの多くは中期後葉段階の加曾利E式期と後期後葉段階の安行式期の所産である可能性が高いと推察される。特に、本稿で取り上げたP78のような最大径が100cm内外で底面までの深さが200cmを超える土坑は、発掘調査以外に少なくとも数基の埋蔵を確認している。これらの土坑を含め、2007年度発掘調査によって、かかる土坑群の分布と戸ノ内貝塚における機能、さらには印旛沼北岸域における戸ノ内貝塚のあり方について解明を進めてゆく必要がある。

###### 【住居跡推定遺構】

当該遺構は、溝状遺構に南接し遺構の約3分の1強が溝状遺構の構築によって破壊されている。第2次調査においては確認には至らなかったが、今次の発掘調査によって新たに埋蔵を確認することができた。遺構規模は現段階では長径が約6m、短径が5mの楕円形を呈する。今次調査では当該遺構に伴うと考えられる明確な炉跡は検出されていないが、遺構全面に焼土と焼骨を含む微細な動物遺存体の破片が分布している。

当該遺構の帰属時期は、遺構確認段階から縄文時代晩期相当の遺物が多く検出されていること、同様に、溝状遺構出土遺物のうち、当該遺構に接するグリッドから縄文時代晩期相当の土器の出土が突出していることなどを考慮すれば、縄文時代晩期に属する住居跡の可能性が高いと考えられる。仮に晩期の住居跡ということになれば、戸ノ内貝塚の過去の調査事例からみても当該期の遺構の検出は初出ということとなり、戸ノ内貝塚を含む印旛沼北岸域の縄文時代晩期の様相解明に踏み込む

貴重な事例と評価できる。

## ②課題

### 【土坑の配置とプラン認定】

これまで本学が行ってきた戸ノ内貝塚の発掘区は多数の土坑群が埋蔵されていることが明らかになりつつある。土坑群は平面形態や確認時の土色等で大きく縄文時代中期後葉段階と後期後葉段階に比定することができる。それらは実際の発掘調査によって概ね傾向が一致していることから肯首される。それらを踏まえた上で中期後葉段階と後期後葉段階にそれぞれ比定される土坑群をまとめると以下のようなになる。

まず、中期後葉段階の土坑群の分布は発掘区東側にややまとまりがあり、かつ、それらが縦列に分布する傾向が窺える。現段階では発掘区の南側から北側へP2、P101、P108、P106、P110、P113、P119、P52、P149などが該当する。これらのうち発掘調査をおこなった土坑はP2とP101のみではあるが、おそらく概ね同時期の所産によると判断される。これらの土坑は平面形が略円形もしくは不整楕円形を呈し、規模も不均一であるがボーリングステッキでの底面確認等によっても概ね100cm内外で底面に達する傾向にある。なお、同様の土坑はかつて印旛村史編纂委員会によって行われた戸ノ内貝塚の発掘調査においても検出されている。土坑からの出土遺物がごく僅少なため所属時期の特定はなされていないが、類似土坑が当遺跡の他箇所においても存在する可能性がある。

次に、後期後葉段階に比定される土坑群は、平面形態、規模から大きく2つに分類することができる。一方は平面形態が略円形ないし崩れた楕円形で、平面の規模が概ね直径30～70cm、底面までの深さが160cm～200cm程度のものであり、他方は平面形態が略円形から楕円形で、平面規模は概ね100～120cm、底面までの深さが200cm以上のものである。断面形は底面から上方へかけ緩やかに開くものが多いが、第2次調査時に検出されたP35、P45は円柱状を呈し、底面にさらに掘り込みがなされている。いずれも中期後葉から後期後葉段階の遺物が混在するが、後期安行式期に属する土器片が多数出土していることが共通しており、おそらく安行式期を中心とした利用が推測される。

ただし、現段階では未だそれらの土坑群の具体的な機能や土坑の配置とプランを特定するには至っておらず、調査事例を暫時追加しながら検討を続けている。2007年度調査において、土坑群のより精緻な発掘調査とともに、プラン配置等の特定を目指すこととしたい。 (井出浩正)

## おわりに

今回の成果報告で強調したのは、縄文時代後・晩期の遺構群のあり方についてであった。晩期に属すると考えられる竪穴住居跡、掘立柱建物跡の可能性を秘めた多数の土坑群などが明らかにされた。

残念なことに、それらの後・晩期社会を映す遺構群は、後世の古墳築造により、一部を破壊されたことが判明した。しかし、異なる時代、時期の遺構の重複は遺跡の宿命であり、むしろそれらの時期区分と遺構構築の順序を正しく把握することが課題になってきたといえよう。溝状遺構より多数の縄文後・晩期の土器が検出されたが、それらは本来的に溝状遺構に共伴するのではなく、近接する竪穴住居跡を破壊した後に覆土に混じって再堆積したことが、混入したわずかな土師器によって証明された。これは、ある意味では幸いであった。というのも、溝状遺構の時代が決定できないまま、道路状遺構のような縄文時代の遺構の可能性を残したままで、当時の様相を復元するには多くの困難が伴うからである。

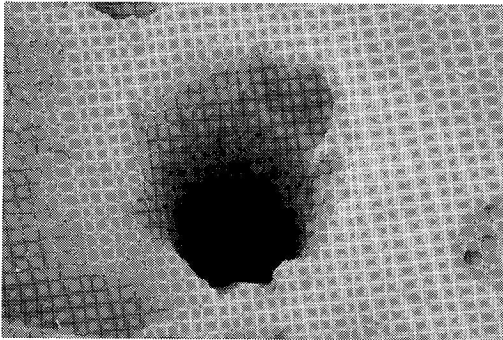
今回、報告した土坑で注目されるのは、P56、P78、P107のように、深さが2mに達するような深い土坑である。これらは組み合わせられて正方形や、長方形の掘立柱建物を構成する柱穴の可能性が大きい。しかし、それならば必要以上に深く掘られた構造上の意味が説明できないし、また覆土中から大型の土器破片が検出される理由も簡単に説明できない。しかし、当地域の後・晩期遺跡には、井野長割遺跡や宮内井戸作遺跡などのように、同様の土坑を伴う遺跡が数多く所在するのである。これらの特殊なありかたも地域社会との関連で考えていく必要がある。来期は晩期と目される竪穴住居跡の調査に取り掛かりたいと考えている。

紙数の制約上、個々人の御名前を列挙しないが、期間中、ご来跡いただき多々ご教示を賜った方々に、厚く御礼を申し上げる次第である。(高橋龍三郎)

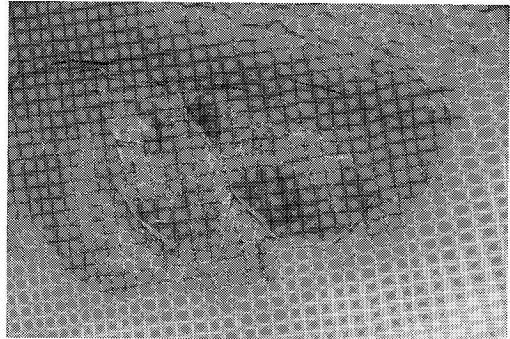
#### 引用・参考文献

- 印旛村史編纂委員会・石神台貝塚・戸ノ内貝塚発掘調査会 1984 『石神台貝塚・戸ノ内貝塚』  
 (財)印旛郡市文化財センター 1998 『宮内井戸作遺跡Ⅰ地区』  
 (財)印旛郡市文化財センター 2000 『戸ノ内遺跡 第5地点』  
 佐倉市 2004 『千葉県佐倉市 井野長割遺跡(第5次)―市内重要遺跡確認調査報告書―』  
 佐倉市教育委員会 2004 『佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書 井野長割遺跡(第8次)』  
 縄文セミナーの会 2004 『第17回縄文セミナー 晩期中葉の再検討』  
 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2007 『蓮田市 久台遺跡Ⅲ』  
 (財)印旛郡市文化財センター 2007 『印旛の原始・古代 ―縄文時代編―』  
 (財)千葉県史料研究財団 2000 『千葉県の歴史』資料編考古1  
 (財)千葉県教育振興財団 2006 『東関東自動車道(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書7 ―君津市三直貝塚―』  
 高橋龍三郎 2002 「縄文後・晩期社会の複合化をどう捉えるか」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』(第47輯)  
 高橋龍三郎他 2005 「千葉県印旛郡印旛村戸ノ内貝塚測量調査概報」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』(第50輯 第4分冊)  
 高橋龍三郎他 2006 「千葉県印旛郡印旛村戸ノ内貝塚第1次発掘調査概報」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』(第51輯 第4分冊)  
 高橋龍三郎他 2007 「千葉県印旛郡印旛村戸ノ内第2次発掘調査概報」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』(第52輯 第4分冊)

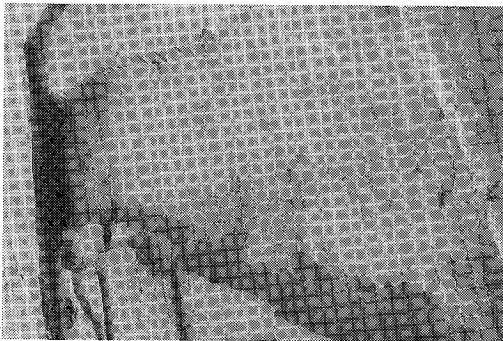
- 田中英世 2007 「井戸遺跡と内野第1遺跡」『貝塚博物館紀要』（第34号）千葉市立加曽利貝塚博物館  
野田市教育委員会 2003 『野田貝塚－第17・18次発掘調査－』（野田市埋蔵文化財調査報告書第24冊）  
野田市教育委員会 2005 『野田貝塚－第20・22次発掘調査－ 清水遺跡』（野田市埋蔵文化財調査報告書第29冊）  
野田市教育委員会 2007 『野田貝塚－第23次発掘調査－ 清水遺跡－第2次発掘調査－』（野田市埋蔵文化財調査報告書 第36冊）  
三浦和信 1980 『印旛村の古代文化』 印旛村教育委員会  
三浦和信 1982 『印旛村史 通史1』 印旛村史編纂委員会



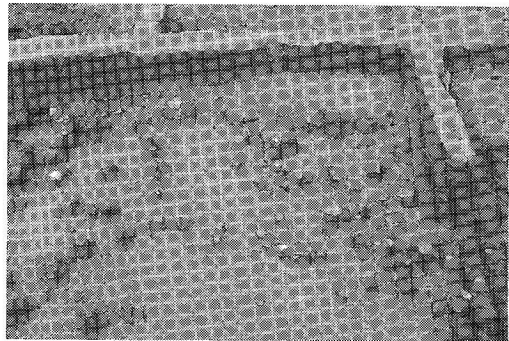
P78完掘写真（西から）



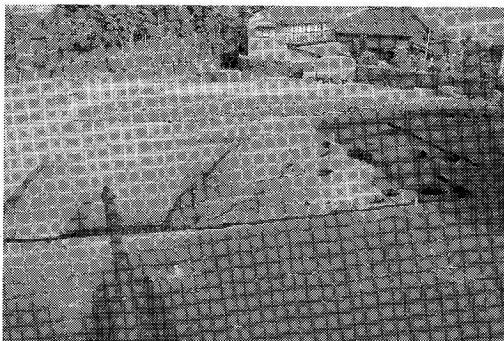
P107土器出土状況（南から）



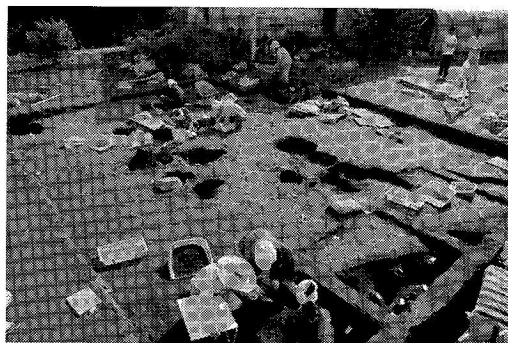
溝状遺構完掘写真（南東から）



溝状遺構遺物出土状況（C-1r・t・s：北から）



調査区全景（北西から）



調査風景（北東から）